

# 久遠

く尾州ウールが紡ぐ絆の物語く

## 【第一話】

M

N 「この番組では、一宮市市民会館等指定管理  
者 J N P 一宮パートナーズが、尾州織縁  
結び旅事業として制作したラジオドラマを  
お贈りします。本日より三夜連続、午後七  
時三〇分より、全三話で放送します。

なお、この物語はフィクションです。実  
在する人物等とは関係がございませんので  
御理解をお願いします。

『久遠 く尾州ウールが紡ぐ絆の物語く』  
第一話。脚本、西田充晴。協力、FMいち  
のみや」

M O U T

S E (尾西市民会館の)

階段を駆け上がる

千歌「恭子、里美、早く！ 二時からだよ、  
はじまつちやうよ！」

恭子「いいじゃん、ちよつとくらい遅れても。  
お目当ては勇樹先輩でしょ。べつに音楽を  
聴くわけじゃなし」

里美「言えてる。シツかし、尾西市民会館つ  
てはじめてくるわ。こんな近くにコンサ―  
トホールあったんだ」

恭子「はじめて？ まあたしかに、里美は芸  
術とかどうでもいい感じでしょ？」

里美「数式で割り切れないものに興味なし」

恭子「サイエンス脳に、芸術の秋は関係なし  
か」

M 吹奏楽

千歌 (M)「青山高校は吹奏楽の名門だ。八  
二三席あるというホールは満員御礼。みん

な美しいメロディーにうっとりしていた。  
でも私の視線はぶっちゃけ、フルートを奏  
でる先輩に釘付け、全集中。恭子の言うと  
おりだ、ごめんなさい」

勇樹の声「千歌、うちに来たらさ、一緒に吹  
奏楽やろうぜ」

千歌（M）「もちろん、私も先輩のところへ  
行きたい。けれど……」

M O U T

恭子「やっぱ青山高校の制服ってシャレてる  
よね。来年は三人揃って着ようね」

里美「青山高校は理数系に強いからな。異議  
なし」

千歌（M）「吹奏楽とは関係のないところで、  
恭子、里美は興奮冷めやらぬ感じだった。  
人のいなくなつたロビーで、私たちは親の  
迎えを待っていた」

恭子「なんか千歌、浮かない感じだけどさ、  
どうしたの？」

千歌「青山高校って、私立でしょ」

恭子「それが？」

千歌「ママが公立にしなさいって」

恭子「なんで？ 千歌の成績なら受かるよ」

千歌「うちの家計、火の車みたいで」

里美「わかる気がする。『がちやまん景気』

なんて言われてた昔と違い、今や繊維産業  
冬の時代だもんな」

恭子「でも、千歌の家は大正時代から続いて  
る老舗の機屋はたやでしょ。大丈夫、大丈夫」

里美「なにを根拠に？」

恭子「伝統の力は偉大だよ」

里美「まあたしかに、伝統はブランド力につ  
ながるか。そうだ、たとえば有名なデザイ  
ナーに生地を使ってもらうとか、そういう  
のどう？」

恭子「なるほど、デザイナー人気にあやかり、  
生地も売れるようになる、か」

千歌「有名なデザイナーって？」

恭子「いるじゃない。我らが一宮に、『モー

ドいちさんはち138』の神楽坂葵さんが」

里美「誰？ 知らんなあ」

恭子「なに言ってるの。青山高校の制服だつて、彼女のデザインでしょうが」

里美「へえ、すごつ」

千歌「私、会ったことがあるよ」

恭子「お、さすが同業者」

千歌「親のお遣いで、うちの生地をファッションデザイナーセンターへ持っていったことがあるの。そこでね、ばったり会った。アラファイブらしいけど、とても綺麗な人だったよ」

恭子「たしかに、年齢不詳な感じだよね」

千歌「ただ、うちの、尾藤毛織の名前を出した途端、なぜかへんな空気が流れちゃって……」

恭子「え、どういうこと？」

千歌「よくわかんない……」

恭子「でもまあ、面識が多少なりともあるならさ、行ってみようよ。リテイルに、アト

リエ兼シヨップがあるみたいだし」

千歌「リテイル？」

S E 学校チャイム

千歌（M）「リテイルは、一宮市栄にあるレトロビルだった。繊維、ファッション、デザインの拠点としてリニユールされたという。私たち三人は放課後、ノーアポで、その二階にあるという神楽坂葵さんのアトリエ兼シヨップを訪ねた」

恭子「尾州ウールを使わせたら、誰も葵さんには勝てませんよねえ」

葵「よくわかってるじゃない」

恭子「葵さん自身の人柄というか、品の良さが、そのデザインにも現れています」

葵「そうよ。結局人なのよね、人」

千歌（M）「次から次へと、恭子が葵さんを持ち上げまくる。あまりに露骨なのに、葵さんはまんざらでもなかつた」

恭子「こいつの、千歌の家なんです、機屋

をやってるんですよ。生地、みてもらえませんか？」

葵「べつにいいわよ。私は常に、良質な素材を探し求めているし。ちなみに、機屋の名前は？」

千歌「尾藤毛織です」

葵「……」

千歌（M）「葵さんの綺麗な顔が、一瞬にして引きつった。あのときと、同じだ」

葵「そういえばあなた、どこかで会ったことがあると思ったら……」

千歌「うちの生地じゃ、ダメなんですか？」

葵「……お父さんに、聞いてみるといいわ」

千歌「パパに？」

葵「そうよ」

千歌（M）「それっきり、葵さんは態度豹変、まったく口をきいてくれなくなってしまう……」

SE 玄関ドア開く

千歌「ただいま」

千歌（M）「家に帰ると誰もいなかった」

真奈美の声「なにもさわってないのに、インターネットつながらなくなっちゃって。みるといてくれない？」

千歌（M）「私はママの頼み事を思い出す」

SE 階段を上がる

千歌（M）「パパとママの寝室に入り、年季の入ったパソコンを起ち上げる。と、ローテーブルの上に、ワインの空きボトルとグラスがあるのが気になった。ママは普段飲まない人だ。パソコンがガリガリ言ってる間に、ローテーブルへ腰を移してちよいと休憩。見上げると、正面、ダンスの上に、結婚式の写真が飾ってある。なるほど、たしか昨日は結婚記念日だったはず。なのに仕事の鬼と化してるパパは出張で、ママ、カリカリしてたっけ。わたしは、写真を手に取る……」

千歌「あ！」



S E 額入り写真が落下

千歌（M）「やばい。大切な写真なのに、額の背板が外れちゃった」

千歌「ン？」

千歌（M）「と、中から赤くて太い糸が顔を出している。なんだ、コレは……」

S E ションヘルの稼働音

千歌（M）「あれから一週間、パパに葵さんのこと聞き出すタイミングをずっと狙っていたけれど、ビミョーにムリだった。そんな中……」

恭子の声「木玉毛織の社長さん、昔から葵さんのこと知ってるんだってえ」

千歌（M）「耳寄りな情報が入ってきた」

恭子の声「ホームページ見てたら、工場見学の予約を受け付けてるし、行ってみない？どさくさに紛れて何か聞けるよ」

千歌（M）「そんなわけで、私は恭子と二人、一宮市西萩原にある、木玉毛織さん、創業

はなんと明治二八年！　うちより古い、老舗の機屋へ向かった」

S E　ガラ紡

社長「こいつはガラガラと音がするだろう。だからガラ紡って呼ばれるようになったんだわ」

千歌（M）「工場へ入ると、社長さんの案内で、まずはガラ紡を見せてもらった。私も恭子も、ガラ紡は社会科の教科書の中でしたか知らない」

社長「明治の初め、臥雲辰致がうんたつむねという日本人が考案したんだよ。誇らしいよねえ。当時は糸車を使った手紡ぎしかなかったからさ、ガラ紡は画期的な発明だった。瞬く間に広まったよ。ただ、明治も終わる頃には洋式の機械にもってかれちまってねえ、減っていく。今じゃ博物館入り、というか、紡績界の殿堂入りなんだろうね。現役で稼働してるのはさ、うちを含めて全国数箇所、つ

てところかな」

千歌「全国数箇所、ですか。私今、貴重な体験してるんですね」

社長「そうだよ。見てごらん。綿の詰まった筒が回転してるだろう。ここから上に向かって綿が引き延ばされて、糸になる」

千歌「スピードはゆっくりですね」

社長「そりゃそうだよ。その代わり、高速織機じゃ使えない『落ちわた』、なんて言うかな、繊維が短かすぎて使えない廃材みたいなもんだが、ガラ紡だとゆっくり動くからさ、そいつが使える」

千歌「エコですね？」

社長「エコか。エコと言うならさ、うちで使ってる素材はすべて、オーガニックコットン。知ってる？ 綿栽培には大量の農薬が使われている。口に入れるものじゃないし、とは言うけれど、うちは有機栽培綿を使うことにした。ちなみに、はい、こいつはお土産！」

千歌（M）「社長さんから、オーガニックコットンで仕上げたというハンカチをもらった。手に取るとなんだか、とっても優しい感じがする」

恭子「（小声で）千歌、早く聞くこと聞かないと」

千歌（M）「恭子が肘でつついてくる」

千歌「あの、社長さん、神楽坂葵さんのことはご存知ですか？」

社長「ご存知もなにも、あの子が駆け出しの頃からよく知ってるよ」

千歌「あの、うちも家業が機屋で」

社長「機屋？ どの？」

千歌「尾藤毛織です」

社長「あーはいはい、尾藤さんトコね」

千歌「葵さんに、うちの生地を使ってもらいたくて」

社長「いやいや、もともと葵ちゃんはむしろ尾藤さんトコの生地を専門に扱ってたから  
いだし」

千歌「え、そうなんですか？」

社長「ただ、ちょっと、いろいろあったみたいでね……」

千歌「と、言いますと？」

社長「わしののような野暮な男の口からはさ、ちよつと……」

千歌「なにがあったか知りたいです。教えてください」

社長「だったら、『ゆたかふえ』に行ってみなよ」

千歌「ゆたかふえ？」

社長「廃業したノギリ屋根の工場が喫茶店になってるんだ。そこで新田満里奈ちゃんがバイトしてるから。彼女も昔から葵ちゃんのこと知ってるから」

千歌「あ、私、満里奈さんなら何度か会ったことがあります」

社長「そーいや、彼女も尾藤さんトコにゆかりがあつたねえ」

千歌「灯台下暗し、ですね。満里奈さんに直

接聞いてみます」

社長「それがいいよ」

SE (ゆたカフェの) ドア開く

千歌(M)「私と恭子は並んで自転車を漕ぎ、  
一路籠屋四丁目にある『ゆたかふえ』に向  
かった。満里奈さんがここでバイトしてた  
とは知らなかった」

恭子「あ、こいつはたぶん、服織はとり神社の赤い  
糸だぞ。うん、間違いない」

千歌(M)「お店に入り、ふうと一息ついた  
ところで、私はママの部屋で発見した謎の  
赤い糸を取り出し、恭子に見せた。恭子は  
オカルトやら占いやらに詳しく、この類の  
ものは専売特許だった」

千歌「服織神社？ どこにある神社？」

恭子「ウソ、知らんのか？ すぐそこにある  
でしょ」

千歌「すぐそこ？ 何県？」

恭子「何県じゃないし。ココ、一宮。真清田

神社あるでしょ」

千歌「うん」

恭子「その中にある神社」

千歌「え、神社の中に神社があるの？」

恭子「あーもう、百聞は一見にしかずだな。  
行ってみる？」

満里奈「はい、千歌ちゃんたち、お待たせ」

千歌（M）「満里奈さんが、鉄板メニュー』と  
ろとろたまごのオムライス』を運んできて  
くれた」

恭子「ホントとろとろお。おいしそう。いた  
だきやっス」

千歌「満里奈さん、いつからここでバイトし  
てたんです？」

満里奈「わりと最近よ。私も将来、ノコギリ  
屋根の喫茶店をやりたいくてね」

恭子「ノコギリ屋根って一宮のシンボルです  
もんね。失いたくないし」

満里奈「そうそう。わかってるじゃない。尾  
藤毛織が倒産したときは、よろしくね。跡

地讓ってね」

千歌「縁起でもないこと言わないでください」

満里奈「ねえ、ソレなあに？」

千歌（M）「満里奈さんが、恭子がこねくり

まわす赤い糸に目を留める」

恭子「あ、コレですか？ 服織はとり神社の赤い糸

だと思えます」

満里奈「あー、アレか。知ってはいるけど、

うちの家お寺だし、神社グッズにふれるの

はNGだったんだよね」

恭子「価値観古いですよ」

満里奈「私じゃなくて、うちの親がね。てい

うか、なんでそんなの持ってたんの？ あ、

もしかして、好きな人できた？」

恭子「違いますよ。千歌のお母さんが持って

たみたいで」

満里奈「真奈美が？」

恭子「なんかブライダル写真の額の中から、

出てきたみたいで……」

満里奈「結婚式の写真から？」



千歌「そうなんですよ」

満里奈「ほうー、なるほどなるほど、そういうことだったか、なるほどねえ……」

千歌（M）「満里奈さんが、まるで汚物にふれるかのごとく、テーブルの上の赤い糸をつまむ」

千歌「え？　満里奈さん？　ちよっと、どこ行くんですか？」

満里奈「トイレに捨ててくるわ。流してやる、きれいさっぱりとッ」

千歌「待ってくださいよ！」

満里奈「こいつのせいだわ！　絶対！」

千歌（M）「かつて『満里奈さんとママは恋敵だった』とかいう噂は、どうやらホントのことらしい……」

千歌「そういえば満里奈さん、もうすぐ誕生日ですよ。私最近、編み物はじめたんですよ。なんでもリクエストしてください」

満里奈「そうです。来月でファイフティーンで

すわよ、ホッホッ」

恭子「（小声で）ファイフテイね……」

千歌（M）「結局、私たちはつかみどころのない満里奈さんに振り回されてしまい、肝心なことは聞けずに終わってしまった。トホホ……」

恭子「とりあえず服織神社行く？」

千歌「だね」

SE （真清田神社の）砂利を踏む

千歌（M）「真清田神社には、毎年七夕祭りの日に参拝している……はずなのに、ほとんどなにも知らなかった。調べてみると、その由緒は古く、平安時代、延喜式内の名神大社となり、神階は正四位上、尾張国の一宮として人々に慕われたという。もちろん、一宮市の地名はこれに由来する」

SE 柏手

恭子「千歌、なにをお願いしたの？」

千歌「満里奈さんの野望が、叶いますように

って」

恭子「ノコギリ屋根の喫茶店？」

千歌「うん、そう」

恭子「古民家カフェ的な路線、はやってるし、  
イイんじゃない」

千歌「たしかに。あ、そういえば、社会の先生が言ってた。『コミュニティは物理的な場所のことじゃない』って。みんなの、集合的な記憶、思い出の共同体がコミュニティなんだって」

恭子「思い出の共同体、か。難しいこと言うねえ。(パンと手を叩き)さてと、お隣さんへ行きますか。服織神社へ」

S E (真清田神社の)砂利を踏む

千歌(M)「服織神社はすぐ隣だった。今まで見落としてたのが信じられない」

恭子「お、神主さんがいるじゃん。掃き掃除してるよ。(神主に)こんにちわ」

神主「ああ、恭子ちゃんじゃない、こんにち

わ。どうしたの？　こんな夕暮れ時に」

恭子「長年の悪友、千歌を連れてきました」

千歌「悪友？」

恭子「縁結びのことが知りたくて」

神主「そうか、好きな人ができたんだね？」

恭子「違います（キツパリ）」

千歌「あの、コレ……」

千歌（M）「私はジーンズのポケットから赤い糸を取り出し、神主さんに手渡した」

神主「ああ、こいつはうちのだね」

恭子「やっぱり」

千歌（M）「服織神社は縁結びの神様として人気があるという。ご祭神は、ヨロズハタトヨアキツシヒメノミコト。ちよつと長い。真清田神社のご祭神、アメノホアカリノミコトの母神で、別名はタナバタヒメノカミ、よく知られた七夕祭りの織姫さんだ」

恭子「ここの『縁むすび守』が超有名なわけ。

パワースポットでもある」

千歌「ぜんぜん知らなかった……」

恭子「千歌の頭ん中は、勇樹先輩一色だからねえ。出会いを求めてなかった、ってことかな？」

千歌「べつに、そんな……（小声で）ことあるし……」

神主「最近ホント若い女性がたくさん来るよ。SNSで広まってるのかなあ。そうだよ。一つ、みせてあげようか？」

千歌「ええ、お願いします」

千歌（M）「『縁むすび守』を一ついただいた。短冊状の御守りを開いてみると、中に赤い糸が二本、入っている」

恭子「一本は神社に、ソコに、結びつける。もう一本を持ち帰るんだよ」

神主「うちに納められた一本は、タナバタの神様がね、責任をもってお相手さんへお届けします」

千歌「コレ、買います！もっと早く知ってたらよかった」

恭子「やれやれだぜ。こいつ、ずっと片想い

なんですよ。未だにコクってない」

神主「好きな人がいるってことは幸せなことだよ。その思いが、届くといいね」

千歌「はい！」

S E 七夕祭りの雑踏

(千歌の回想)

千歌 (M) 「先輩とデート、っぽいことをしたのは一度きり。七夕祭りの日、夜の本町アーケードを二人で歩いたっけ。そのときの光景が脳裏に蘇ってくる……」

勇樹「昔は真清田神社のすぐそばまで木曾川がきてたって。真清田っていうのも、綺麗な水、清流を意味してるらしいね」

千歌「そうなんだあ。だいぶ地形も変わったんですね」

勇樹「とくに尾西辺りはそうらしい。江戸時代にさ、大規模な河川工事があったって。川の流れを堰き止めたらしいよ。それで肥沃な農地が広がった」

千歌「先輩、詳しいですね」

勇樹「爺ちゃんの代まで農家だったし」

千歌「ああ、そうでしたね」

勇樹「千歌、人柱観音って知ってる？」

千歌「え、なんですか？」

勇樹「金刀比羅神社はわかる？」

千歌「ええ、はい」

勇樹「その奥にさ、石造りの観音像があるんだ。その河川工事で与三兵衛って村人が人柱にされたとか。そんな言い伝えが残ってる」

千歌「人柱って、生け贄のことですか？　な

んだか怖い」

勇樹「古い機織り唄にも『起おこし東の中島西に、人のとぼさぬ灯ひがとぼる、伝説にいう人柱の怪火』と出てくるとか。与三兵衛の魂が浮かばれず、火の玉となり、化けて出てきたとか、なんとか……」

千歌「それっていわゆる、ご当地の怪談話です  
すね？」

勇樹「今でいう、濃尾大橋の辺りから信行寺の方まで飛んでたつて……」

千歌「でも、少なくとも私のまわりじゃ見たっていう人、聞かないですよ」

勇樹「耕地整理が終わった頃から誰も見なくなったらしい。だからみんな忘れてしまつたんだと思う」

千歌「そうなんだあ」

勇樹「けれど濃尾大橋をつくったとき、工事で亡くなる人が出たらしく、今さらながら与三兵衛のことが思い出され、地元のお金を集めてさ、建てたんだって、人柱観音を」

千歌「与三兵衛さんの魂を鎮めた、つてことですね？」

勇樹「そうそう。でね、オレ気になって、行ってみたんだわ、人柱観音まで。そしたらさ、なんつーかこう、与三兵衛って男のうめく声が聞こえてくるような、そんな不思議な感覚を味わった。ちょうど台風が来て



たし、激しい、雨の日だった。千歌もさ、  
金刀比羅神社まで行くときがあったら、つ  
いでにのぞいてみなよ」

千歌「えー、なんかちよっぴり怖いし、イヤ  
ですよお」

千歌（M）「あの日は、たしかそんなたわい  
もない話を、先輩としていた。自分の気持  
ちを伝えるチャンスは何度もあったのに、  
手の平に『好き』と書いて何度も呑み込ん  
で気持ちを整理してたのに、結局最後まで、  
言葉が出てこなかった……そして私はい  
つの間にか、人柱観音のことを忘れてしま  
う……」

S E 階段を上がる

千歌（M）「家に帰ると私は、ママが戻って  
こないうちにと、赤い糸を元どおりに片づ  
けておいた。ブライダル写真に映る、幸せ  
そうなパパとママ……まさか『縁むすび  
守』の御利益だったとは……私の願いも、

叶うといいな……」

SE スマホ着信

千歌（M）「と、ふいに、満里奈さんから着信が入った」

満里奈の声「木玉毛織の社長さんから話を聞いたよ。千歌ちゃん、神楽坂葵の過去が知りたんだって？」

千歌「過去、っていうか、うちの生地を使ってほしいだけです」

満里奈の声「難しいと思うよ」

千歌「うちだって品質には絶対の自信があります。負けてません」

満里奈の声「そういう問題じゃないから、こいつは。大人の問題だから。黒歴史があるから」

千歌「黒歴史？ え？」

M

N「『久遠　く尾州ウールが紡ぐ絆の物語』  
第二話は、明日七日、水曜日、午後七時三

○分から放送します。みなさま明日もぜひ、  
お聴きくださいね」

M  
S  
O  
U  
T

〔第一話・了〕

【第二話】

M

N 「この番組では、一宮市市民会館等指定管理  
者 J N P 一宮パートナーズが、尾州織縁  
結び旅事業として制作したラジオドラマを  
お贈りします。

なお、この物語はフィクションです。実  
在する人物等どうとは関係がございませんので  
御理解をお願いします。

『久遠　く尾州ウールが紡ぐ絆の物語』  
第二話。脚本、西田充晴。協力、FMいち  
のみや」

M O U T

S E 七夕祭りの雑踏

満里奈 「涼介、なんかあのキャバ嬢みたいな  
人、こっち睨んでるよ」

葵 (M) 「一八年前、私は東京から涼介を追

い、七夕飾りで彩られた一宮の街へ来た。  
その日は、土用の丑の日、たまたま入った  
お店で……」

涼介「鰻井、食べた？」

満里奈「え？ まだ半分」

葵（M）「涼介を見つけた」

涼介「もういいだろ。行くぞッ」

葵「逃げるんだッ！」

葵（M）「涼介の顔が、一瞬にして凍りつく」

葵「『葵は完璧すぎてオレにはもったいない』

とか、調子のいいこと言っちゃってさあ、

ホントの理由は、コレだったんだ！」

涼介「おまえ、なんでここに……」

葵「実家くらい、簡単に調べがつく」

涼介「行ったの？」

葵「こっちへ来てるって言うから」

満里奈「あ、そのオバサン！ うちの

涼介になんの用ですか？」

葵（M）「涼介の浮気相手、らしき真鍋満里

奈の存在が邪魔だった」

葵「オバサン？ オバサンって誰？」

満里奈「ユー！」

葵「私、二九ですけど」

満里奈「あ、ごめん。化粧濃いし香水キツイし、人生に疲れてる感あるしバツイチ感あるし、年上かと思ったあ」

葵「べつに人生疲れてないしバツゼロだし、ていうか、うちの涼介ってなに？」

満里奈「だってうちのでしょ。婚約してんだし」

葵「婚約？ 涼介、どういことツ！」

涼介「(店主に)お代はココ置いときます」

葵「あ、逃げた！」

葵(M)「その日、涼介は家に帰らなかった」

S E ションヘル稼働音

涼介「ただいまあー、って！ おまえ！ なんでうちにいんのツ」

葵「涼介ッ、昨晚どこに泊まった！」

涼介「どこって、その……」

葵「浮気なんて絶対許さない！」

涼介「浮気じゃねえし。誤解だつて」

葵「あのね、私は涼介との結婚、本気で考えてたんだよ」

美佐紀「葵さんッ、どこ行つたの？」

葵「あ、お母様」

涼介「お母様？」

美佐紀「ションヘルみたいでしょ？ 手が空いたから、案内するけど」

葵（M）「涼介のお母さんに連れられて、こぎり屋根の中へ入ってみれば、かの有名な名機、ションヘルが動いていた」

葵「すご〜い。生ションヘルだあ。はじめてみるう」

美佐紀「葵さん、詳しいのね」

葵「私の好きなブランドのデザイナーさん、国産の生地を大切にされてるんですよ。だから知ってるんです。ションヘルって、織るスピードは遅いけれど、糸を強く引つ張らないから、柔らかな風合いがでるんで

「しよ？」

美佐紀「そのとおり。うちにはションヘルが一〇台あるけど、みんな御歳おとしは百歳の旧式よ。私が生まれる前から動いてる」

涼介「なんか超マニアックな話になってね？」

葵「私、そのデザイナーさんが愛知県木曾川町の工場について語ってたのをテレビで観たことがある。尾州ウールがブランドを支えてたんだって驚いたし、それだけココの生地が高品質ってことだよ」

美佐紀「尾州ウールも知ってるんだ」

葵「当然ですよ。毛織物の世界三大産地」

美佐紀「なんか嬉しくなっちゃうね。企業秘密だから言えないけど、うちだって国内外のトップブランドと契約してるわよ」

葵「え、どこですか、気になるう」

葵（M）「と、ちょうどそこに、満里奈が出没しやがった」

葵「なんであなたがここにいるの！」

満里奈「そっちこそ！ 私は仕事に来てんの。



ここ、私の職場」

葵「だったらお母様、私もここで働かせてください。花嫁修業になりますし」

満里奈「花嫁修行、はああ？ 冗談じゃない！

ホントあんた、ストーリーカードわ」

葵「誰がストーリーカードよ」

満里奈「だって涼介が、そう言うんだもん」

葵「涼介、どういうこと？」

涼介「言っていない言っていない。ストーリーカード

じゃない、ストーリーカード」

葵「タバコ吸わないし。（美佐紀に）お母様、なにか私にも手伝わせてください」

美佐紀「うーん、そう言ってくれるのはありますがたいけど、ここはもう、閉めちゃうしね

……」

葵「閉める？」

美佐紀「つまり廃業ね、廃業。儲かる仕事じゃないから……」

葵「トップブランドとの取引があるって……」

美佐紀「あるにはあるけど、旧式の織機しよつきじゃ、いくらも織れないし。かといって品質を捨て、大量生産できる高速織機を入れたところで人件費の安い海外には勝てっこない、でしょ？」

葵「やめちゃうなんて、もったいないですよ」

美佐紀「そう思ったから、今日まで続けてきたんだけど……社長が、お爺ちゃんがね……」

涼介「そこはオレから言うよ。爺ちゃんが脳梗塞で倒れたんだ。意識はあるにはあるけど、まるで植物状態でさ。自分が誰かもわかってない感じで……だから、オレは東京を離れることにしたんだ」

葵「跡を継ぐってこと？」

涼介「いや、跡は継がない。ただ、音楽はやることにした。オレの挑戦は、終了したんだよ。ホントはもっと早くやめるべきだった。爺ちゃんが応援してくれてるうちは、投げ出したくなかった」

葵「なにそれ。お爺ちゃんのために演奏して  
たつてこと？」

涼介「最後はそうなたたかもしれない。葵、  
君を巻き込んでゴメン。許してほしい」

葵「そんな言葉、聞きたくない」

涼介「プロを目指すなら、オレの他にもっと  
ふさわしい相手がいるよ。それに、葵の家  
は資産家だし、こんなオレにはもったいな  
いし」

満里奈「そうそう、他にもいるから、男なん  
てね、たーくさんツ、三五億」

葵「工場は継がない、音楽はやめる、もうわ  
けわかんないッ。お母様、なにか言っ  
ててください」

美佐紀「音楽では生活できないでしょ。やっ  
と現実をみたか、つて感じ」

葵「お母様……」

美佐紀「会社だって無理に継がなくていいの  
よ。うちはね、尾藤一座って言われるくら  
い、お爺ちゃん中心でまわってたから。あ

りえないのよ、船長のいない船で、大海原に出るなんて。やめ時だと思う。無理に続けて先祖代々誇ってきた、この尾藤毛織の名を汚すわけにもいかないし」

葵「工場、ホントにやめちゃうんですか？」

美佐紀「買い手もついたし」

葵「買い手が？」

美佐紀「とある運送会社がね、倉庫に使いた  
いって」

葵「ぜんぜん違う用途じゃないですか」

美佐紀「そんな辛気くさい顔しないで、笑つて。尾藤一座はね、かいさくん！」

葵「『かいさくん！』って、そんな……」

S E ションヘルの稼働音

葵（M）「私は涼介のお母さんから、事の経緯をすべて聞いた」

美佐紀「お爺ちゃんのお父さんはね、尾藤毛織の二代目だった。奥さんと二人で、誰も見たことのない、最高の生地を追い求めて

いた。ところが一宮空襲で会社が焼けたとき、奥さんが生地設計図を取りに戻り、亡くなってしまった。戦後、人々は洋装を好むようになり、既製服が出回り、繊維業界は空前の好景氣を迎えた。いわゆる『がちゃまん』ね。機織り機がガチャンと動けば万のカネ、いい時代だったと回顧する人もいるけど、お爺ちゃんのお父さんは酒びたりになった。テキスタイルの天才だったというけれど、生地設計図が描けなくなっていた。なぜだか、わかる？」

葵 「その設計図のせいで、空襲で……」

美佐紀 「そう、奥さんが焼かれましたか。お爺ちゃんが一六のとき、お父さんは病気で亡くなった。『もう一度あの生地がみたい。女房と一緒に織った、あの生地がみたい』と、うなされてたとか。お爺ちゃんも成人して、会社を継いだ。以来一心不乱に働いたわ。父と母がみつけたという生地を、最高の生地をもう一度、蘇らせたい

と思つてたんでしよう」

葵「そんな過去が、あつたんですね……」

美佐紀「涼介はというと、昔から音楽で食べてくと言つて聞かなくてね。別れた夫がバンドマンで、その影響かもしれないね。お爺ちゃん、継がせるのは諦めてた。理由は二つある。半端な気持ちで尾藤毛織を受け継いでほくない、というのと、お爺ちゃん自身が夢を追いかけてた人生だったから、涼介の夢もね、応援したい気持ちがあつたんだと思う」

葵「涼介から『お爺ちゃんの病室へ行くから、ついてきてほしい』と頼まれました」

美佐紀「この前、運送会社の常務さんが来たのよ。工場引き渡しの話をしてたら突然あの子、『爺ちゃんの意志を確認したい』つて言うのよ。今のお爺ちゃんじゃ言葉も通じないしムリよ。それでもあの子、お爺ちゃんに会いに行くと言つてたわ。まあそんなことより、葵さんのお父さん、東京セン

トラル銀行の役員なんだってね。涼介のこ  
と、よろしくお願いします。逆タマだわぁ」

葵「もちろんですよ、お母様。あ、でも、涼  
介とあの人、どんな関係なんですか？」

美佐紀「満里奈ちゃんのこと？」

葵「はい」

美佐紀「幼馴染みよ」

葵「それだけ、ですか？」

美佐紀「満里奈ちゃんの家はお寺でね。あつ  
ちはあっちで跡継ぎ探しに必死みたいよ」

葵「なるほど……」

S E 車が走る

葵（M）「その日の夕方、私と涼介は早速お  
爺ちゃんのいる一宮総合病院へ向かった」

葵「なんであなたがいるわけ？」

満里奈「なにか問題でも？」

葵（M）「なぜか満里奈もついてきた」

S E ドア開く

葵（M）「ベッドに横たわる涼介のお爺ちゃんは、まるでお人形さんのようだった。目は開けているけど、外界との接続がシャットダウンされてるような感じだった」

葵「お爺ちゃん、はじめまして」

茂「……」

満里奈「聞こえてないと思う」

葵「え？」

涼介「ずっとこんな感じなんだ。どうすればいいと思う？」

葵「どうすればって……」

涼介「三人寄れば文殊の知恵って言うだろ。

なにかアイデアない？」

葵「アイデア？　そうねえ……外へ、連れ出しちやうとか？　ダメ？」

涼介「外へ？」

葵「なにか刺激があったほうがいいと思う。なにもない部屋にずっといたら、私たちがだってボーツとしちやうじゃない」

涼介「やってみる価値は、あるか」



葵（M）「涼介は車椅子を借りに病室を出た。  
そして連れてきたのが、真奈美だった」

SE ドア開く

葵「涼介、隣にいる人、どちらさん？」

涼介「看護師の真奈美さん」

真奈美「はじめまして」

葵「なんで下の名前で呼んでるわけ？」

涼介「仲良くなつてさあ……」

葵「車椅子を借りに行っただけでしょ？」

真奈美「はい、お持ちしました」

満里奈「ちょっとあんた、涼介から離れて。

距離近くない？」

葵（M）「私たちはお爺ちゃんを車椅子に乗  
せると、中庭に出た」

満里奈「ねえ、お爺ちゃん花壇に並んだ向ひま日

葵わり見てるよ」

葵（M）「それを見てるっていうんだろうか  
……私には、視線が合っていないように感  
じられた」

真奈美「あの、思いつきですけど、お爺ちゃ

んに涼介さんのサックス、聞いてもらっては  
どうでしょう？」

満里奈「それアリかも。お爺ちゃん、一度も  
聞かせてもらってないって、嘆いてたし」

涼介「音楽で食べるようになったら、招待す  
るつもりでいたんだ」

葵「ていうか待った！　なんであの人サッ  
クスのこと知ってるわけ？」

涼介「仲良くなつてさあ」

葵「打ち解けすぎでしょ、いつの間に」

真奈美「うちの病院、毎月慰問コンサートし  
てるんです。せっかくだから、どうでしょ  
う？　お爺ちゃんだけじゃなくて、みなさ  
んに聞いてもらっては？」

葵「そういう話だったら、悪くないわね。私  
も一枚噛んであげる。涼介、一緒にどう？」

涼介「いや、オレはもう……」

葵「（遮り）涼介の人生に、音楽は必要だと  
思う。だから私が、やめさせない」

真奈美「お手伝いしてくれるんですか？」

葵「お手伝いじゃない。私こうみえてコレするんだから、コレ、わかる？ この絵になるジェスチャー」

真奈美「リストカットですか？（天然）」

葵「ヴァイオリン！ こんな大振りにリスカするヤツいたら、怖いわッ！」

S E ドア開く

葵（M）「病棟に戻ると、涼介の親戚だとい  
うおばさんが来ていた」

親戚「難しいと思うよ」

涼介「ほんの少しで、一瞬でいいんです。爺  
ちゃんと話ができたら……」

親戚「して、どうするのさ」

涼介「工場の引き渡しが迫ってるんです。爺  
ちゃんの気持ちを、どうにか確認したい」

親戚「仕方のないことだよ。この日は来るべ  
くして来たんだ」

満里奈「そうそう、涼介はお坊さんになって  
うちのお寺を継ぐんだし、もういいいじやな  
い」

葵「絶対そうはさせない」

満里奈「おまえに決定権はない」

葵「おまえって言うな。私にも名前がある。

神楽坂葵、キラキラしてるでしょ」

満里奈「じゃ、カグラーか」

葵「カグラー？」

涼介「おい、ちよつと！」

葵（M）「振り向くと、お爺ちゃんが棚の上の写真をじっとみていた」

涼介「おばさん、あの写真……」

親戚「ああアレね、茂さんと奥さんは、毎年のように伊勢神宮へ行ってたから。たしか新婚旅行もそうだったし」

葵（M）「それはおかげ横丁で並んで立つ、お爺ちゃんとお婆ちゃんの写真だった」

葵「もしかして、わかるんじゃない？ 奥さんのこと、伊勢神宮のこと」

涼介「行ってみるか、伊勢神宮まで」

SE 雨の音

葵（M）「出発の日は雨だった。レンタカーを借り、私と涼介、お爺ちゃん、そしてあいつ、満里奈までついてきて、東名阪道に乗った」

満里奈「この際、ハッキリしておきたいことがあるんだけど」

葵「なに？」

満里奈「カグラーがこうも涼介に付きまとう理由、教えてほしい」

葵「理由もなにも、普通に彼女だし」

満里奈「別れたんでしょ？」

葵「雨降って地固まる、って言うじゃない」

満里奈「地固まってないでしょ、降りっぱなしでしょ雨。つーかリアルに降ってるし」

葵「大丈夫、天気予報じゃ午後から快晴」

満里奈「関係ないし」

葵「はいはい、わかったから。それじゃ私の恋バナ、聞いてくれる？ 私ね、好きでもない人と、政略結婚させられそうになったことがある」

満里奈「攻略結婚？ 戦国時代か？」

葵「人を顔で判断するのはよくないけど、相手はイルカとカメレオンを足して二で割ったような感じだった」

満里奈「ン？ 想像できない」

葵「私、涼介に泣いて頼んだっけ。『彼氏の役お願い』って。そしたら涼介、パパの前に出てくれた。存在自体パワハラって会社じゃ評判のパパなのよ。それなのに涼介、堂々と『世界三大美女、クレオパトラ、楊貴妃、小野小町に次ぐ、葵さんをください』って、言ってくれたのお」

涼介「そんな枕詞、つけたか？」

葵「パパ、怒髪天をついたけど、涼介は臆することなく、なんと！ まるで映画のようにね、三日三晩、パパの許しがでるまで家の前に立ってくれた。カッコよすぎい！」

涼介「時給五千円って言うし」

葵「でもパパは『葵はパンドラの箱入り娘だ。

絶対に渡さん！』の一点張り」

満里奈「パンドラの箱は、開けちゃいけない箱だしね」

葵「その代わりママが、交際を認めてくれたわけ。どう？ 感動ストーリーじゃなくて？ 泣けてこない？」

満里奈「泣けるツボがどこにあるか、逆に教えてほしい」

葵「それに涼介はなんと言っても、私のヴァイオリンを最初に認めてくれた、大切な人なのよ」

満里奈「要するに、ヘタクソってことね」

葵「どうやら、死にたいらしいな！」

満里奈「うわ！ 首絞めるな！ 助けて、涼介！」

S E 車のスリップ音

涼介「やめろ！ 事故るぞ！」

葵「落ちちゃえ！」

満里奈「ドア開けようとしてる！」

S E 車のスリップ音

S E 人ばかり（伊勢神宮）

涼介「生きてるって、素晴らしい」

葵（M）「伊勢神宮に着くと、私たちは早速  
おかげ横町へ入った。あの写真は、ここで  
撮ったものだ」

葵「お爺ちゃん、おかげ横丁、わかる？」

茂「……」

葵（M）「ところがまったく反応なし、だっ  
た」

満里奈「ここがどこかすら理解してない感じ」

葵（M）「なにを見ても、どこを回っても、  
お爺ちゃんの注意を引くことはなかった」

涼介「婆ちゃんとの思い出はなんだったんだ  
よ。マジで悲しくなる……」

満里奈「あ、お爺ちゃん寝ちゃったよ。こり  
や絶望的だわ……」

S E スマホの着信音

涼介「（電話に出て）もしもし……」

満里奈「おいしいものでも食べて、帰る？」

葵「一つくらい、爪跡残したいしね」



涼介「（通話中）うん、うん、わかってる、みんなが知ってる曲も入れるし」

満里奈「なんか、音楽の話してるよ」

葵「みたいだね」

涼介「（通話中）うん、じゃ、また後で電話するし。待ってて（通話おわり）」

葵「誰と話してたの？」

涼介「真奈美さんだよ。慰問コンサート、明後日に決まった」

葵「え、急すぎるじゃない。ていうか、乗り気じゃなかったくせに」

涼介「ひっきりなしに電話がきてさ、真奈美さん、顔に似合わず強引なんだわ」

S E スマホに着信

涼介「あ、また真奈美さんだ。（電話に出て）

もしもし……え？ ピアノ弾けるの？  
絵になるなあ。伴奏してよ。オレ、真奈美さんとコラボしたい。うん、わかった、練習にも付き合うし」

葵（M）「私と満里奈は、涼介を置いて帰る

ことにした」

涼介「（二人に）おーい！ どこ行くのッ？」

満里奈「カグラート、松坂牛行くからッ！」

葵「くたばっちまえ！ アーメン！」

涼介「どうやって帰るんだよッ？」

満里奈・葵「電車に決まってるでしょ！」

S E 雨の音

葵（M）「コンサートの日も雨だった。ロビ

ーにパイプ椅子が並び、お客さんが数十人

……涼介とはあれから口きいてなかった

が、それと演奏とは別」

M 演奏 A

ある程度演奏が流れたところで、

葵のモノローグを重ねる。

葵（M）「客席に、お爺ちゃんがいた。私た

ちの方を見ていた。けれどその表情を見れ

ば、音が届いてないことが、心に響いてな

いことが、わかってしまった……」

演奏 F・Oで、拍手喝采！

真奈美「涼介さん、素敵な演奏でした」

涼介「ありがとう。でも爺ちゃんが、やっぱり……」

真奈美「仕方ないですよ。やれるだけのこと  
は、やってみたんです」

満里奈「みせつけなくていいじゃない。  
息ぴったりだし。イラつくわあ」

葵（M）「演奏が終わった途端、私はいきり  
立った満里奈に噛みつかれた」

葵「これでわかったでしょ。私たちには絆が  
あるの」

満里奈「私誰でもよくて涼介にくっついてる  
と、そう思っただけ？」

葵「そうでしょ。結婚願望すぎて、リミッ  
ター解除されてる感じだし」

満里奈「私たち保育園のときから一緒なんだ  
からねッ。こっちにだって絆はある」

葵「へえ、どんな絆？」

満里奈「私、小学生のとき、ホームルームの  
時間にオナラしちゃった……」

葵「は？」

満里奈「ぷくんで臭いが広がって、犯人探しみたいな感じになっちゃって、私もうマジ首吊って死のうと思ってたら、涼介、頭ぼりぼり掻きながら席を立ち、『ごめん、オレ』って言うてくれたのお」

葵「ほー」

満里奈「涼介は、満里奈を護ってくれるナイトだと思った」

葵「まったく共感できない」

満里奈「次は、涼介の番だよ」

涼介「なにが？」

満里奈「カグラーの話も、私の話も、ぜんぶ聞いたよね。カグラーか私か、決めてよ」

涼介「は？ そんなことより、わかってる？

明日だぞ、工場の引き渡し」

葵「うわ、露骨に話を逸らそうとしてる」

涼介「だって考えなきゃいけない優先順位は

……」

葵「（遮り）工場の方が大事ってこと？」

涼介「そうは言っていない」

満里奈「選んでよ！ 私か、カグラーか」

真奈美「涼介さんて、モテるんですねえ」

涼介「イイところに来た、真奈美さん。そう

なんだよ、オレが好きなのは、真奈美さん

なんだよ！」

満里奈・葵・真奈美「はい？」

涼介「ということに、しておいて。じゃね！」

葵「逃げるな！」&満里奈「足はやッ」

### 間

常務「たしかに、契約書は受け取りました」

美佐紀「こちらは工場の鍵一式です」

葵（M）「そして、工場引き渡しの日を迎えることになった」

常務「なんかやけに人が集まってるねえ。物見遊山でもあるまいし。さあこの瞬間から君たちは部外者！ 散った、散った！」

満里奈「待ってください。写真を一枚、撮らせてください」

常務「それくらいなら、構わんけど」

満里奈「はーい、みんなあ、集合う！」

葵（M）「車椅子のお爺ちゃんをセンターに、みんなで写真を撮った。その写真は、今も大切にしまつてある」

片岡「ちよつと待ったあ！　最後にがちゃま  
ん、動かそうぜ！」

美佐紀「最後の打ち上げ花火か。悪くないわ  
ね。やっっておしまい！」

葵（M）「お爺ちゃんの右腕だったという片  
岡のおじさんが、満面に笑みを浮かべて駆  
けていく。熟練の慣れた手つきで、シヨン  
ヘルを動かした」

S E シヨンヘルの稼働音

片岡「涼介！　聞こえるかッ？」

涼介「はい？」

片岡「（大声で）聞こえるかッての！」

涼介「聞こえてますよ」

片岡「わしの声じゃねえって。こいつだよ、  
がちゃまんの音だ。わしらの、尾藤毛織の

がちやまんだ！ おまえがサックスなら、  
わしらはがちやまんの演奏家だ！ この音  
と共に、がちやまんと共に、尾藤毛織は百  
年ッ、やってきたんだぜッ！」

葵（M）「と、そのときだった。振り返ると、  
お爺ちゃんが泣いていた。半分だけ開いた  
眼差しから、濁りのない透き通った雫が、  
溢れて、頬を濡らしていた……」

満里奈「こんなことって……」

涼介「爺ちゃんッ、がちやまんが、わかるん  
だね！ がちやまんが！」

茂「ガ、ガガ、ガ、ガガ……」

涼介「爺ちゃん、動いてるよ、がちやまんが、  
動いてるよ……」

茂「ガ、ガガ、ガ、ガガ」

涼介「爺ちゃん……」

葵「涼介、どうするの？ これでおしまいに  
するわけ？」

涼介「常務さんッ」

常務「なんだね？」

涼介「契約書、返してくださいッ」

葵（M）「涼介は、跡を継ぐことを決めた」

間

美佐紀「葵さんはどうするの？　これから」

葵「しばらくここにいてもいいですか？　や

ってみたいことが、できたんです」

美佐紀「やってみたいこと？」

葵「生地を織るだけじゃなくて、デザインも

して、服をつくってみたいんです」

美佐紀「ブランドを立ち上げるってこと？」

葵「はい、パパがついてるし、バックアップ

は万全です」

美佐紀「それは頼もしい」

葵（M）「私には新しい目標ができた。涼介

が生地をつくり、私がデザインする。それ

はサックスとヴァイオリンに代わる、新し

いパートナーシップだった、はずなのに：

…」



M

N 「『久遠　　く尾州ウールが紡ぐ絆の物語』

最終話は、明日八日木曜日、午後七時三〇

分から放送します。みなさま明日もぜひ、

お聴きくださいね」

M  
　　く  
　　O  
　　U  
　　T

〔第二話・了〕

【第三話】

M

N 「この番組では、一宮市市民会館等指定管理  
者 J N P 一宮パートナーズが、尾州織縁  
結び旅事業として制作したラジオドラマを  
お贈りします。

なお、この物語はフィクションです。実  
在する人物等どうとは関係がございませんので  
御理解をお願いいたします。

『久遠　く尾州ウールが紡ぐ絆の物語』  
最終話。脚本、西田充晴。協力、FMいち  
のみや」

M O U T

S E 自転車、チリンチリン

千歌（M）「何事も三顧の礼というのが大事  
だ。私はリテイル二階にある葵さんのアト  
リエ兼ショップへ、恭子と一緒にもう一度

足を運んでいた」

葵「くだいなあ、申し訳ないけど、尾藤毛織の生地に興味はないから」

千歌「あの、今日はそういうお話をしに来たんじゃないです」

葵「じゃなにしに来たの？」

恭子「すぐオムライスのおいしい喫茶店を見つけたんですよ」

葵「エグロンでしょ？」

恭子「エグロンもそうですけど、他に見つけたんです」

葵「それが？」

千歌「葵さん、一緒に行きませんか？」

葵「は？　なんで？」

千歌（M）「大丈夫、葵さんがオムライスに目がないという情報はすでに、木玉毛織の社長さんから入手済み」

葵「仕方がないわねえ。脈絡が意味不明だけど、付き合っただけあげる」

千歌（M）「結局口説いてるうちに、葵さん

は折れた」

SE 車が走る

千歌（M）「私たちは葵さんのレンジローバ  
ーに乗り込み、『ゆたかふえ』に向かった。  
これは……」

里美の声「満里奈さんに葵さんをぶつけてみ  
る、ってのはどうだ？ 少なくとも硬直し  
た事態を打ち破る化学反応の一つや二つは  
起きるだろう」

千歌（M）「里美のアイデアだった。もちろ  
ん、葵さんはなにも知らない」

恭子「『モード138』の服って、なんか黒  
系が多いですよね」

葵「モード系っぽいでしょ？」

千歌「でも高いですよ。私たちのお小遣いじ  
ゃ到底手が届きません」

千歌（M）「値札を見ると、どれもこれも万  
単位から、だったし」

葵「ザクとは違うんだよ、ザクとはッ」

千歌「なんの話ですか」

葵「素材が違うのよ、素材がッ。天下の尾州ウールだから。それでも価格はかなり抑えてるほうよ。見る人が見たら、かなりリーズナブルに映ると思うわ」

千歌（M）「ちなみに、リテイルの一階では、尾州で織られた様々な生地が集められ、販売されている。まるで倉庫のようで、山積み。葵さんは、そこで掘り出し物を見つけるのが」

葵「もはや趣味」

千歌（M）「らしい」

葵「おおっぴらに言うとな怒られちゃうけど、世界のトップブランドで使われてる生地も普通にあるから。マジスゴイよ」

千歌（M）「そこまで生地探しにギリギリしてるのに、どうして尾藤毛織だけ、それこそ毛嫌いするのだろうか」

SE （ゆたカフェの）ドア開く

満里奈「なんでカグラーが来んのよ！」

葵「つーか真鍋こそ、なんでココにいる！」

満里奈「真鍋って言うな！ 新田だぞ。結婚してんだぞ。苗字変わってんだぞ」

葵「じゃ、新田でいい？」

満里奈「呼び捨てかよ。年上だぞ」

千歌（M）「葵さんと満里奈さんは、お互い顔を見合わせるなりエンジン全開、のしり合いがはじまった。これはまさかの展開だった」

葵「帰るわッ」

千歌「（葵に）待ってください。満里奈さん、『とろとろたまごのオムライス』二つ、お願いします」

満里奈「断る。カグラーなんか水で充分だし」

千歌（M）「どうやら、満里奈さんと葵さんと間にも、過去なにかあったらしい」

満里奈「帰るの？ 帰らないの？ どっち？」

葵「うツさいなあ。ていうか真鍋」

満里奈「新田」

葵「新田、だいぶ顔面が劣化してるねえ」

満里奈「そりゃそうでしょ。誰かさんと違って主婦は忙しくてねえ。手入れが行き届かなくて」

葵「お見合い、一〇一回したんだって？ 昔のテレビドラマじゃあるまいし。噂に聞いてるよ」

満里奈「涼介が優柔不断すぎたのよ。待ってられなかったし」

葵「まあたしかに、あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、だもんね」

満里奈「つーか、カグラーの場合は自業自得でしょ。フランス行ったまま帰って来ないんだから」

千歌「葵さん、フランスにいたんですか？」

葵「だってファッションの本場でしょ」

満里奈「こいつ、『涼介が生地をつくってえ、私がデザインするのお』とかなんとかノロケやがって、フランスへ飛んだわけ」

葵「同じ真似るなら、もっと品良く真似しろ」

千歌「葵さん、あの、ぶっちゃけパパとどう  
いう関係だったんですか？」

葵「それは……」

満里奈「え、千歌ちゃん聞いてないの？ カ

グラーは涼介のストーリーカーだったんだよ」

葵「殺すぞ、おまえ」

満里奈「ほら、本性でた」

葵「婚約してたのよ」

千歌「え？ パパと？ ウソ……」

葵「ウソついてどうする」

満里奈「大丈夫、千歌ちゃん、さすがに婚約  
まではウソだから」

葵「涼介に、『一年だけ待って』って、言っ  
てたんだよ。渡仏するとき」

満里奈「シッかし、それがなんで五年になる

かなあ？」

葵「そりゃまあ楽しくて、楽しすぎて……」

ヨーロッパ最高！」

満里奈「現地に彼氏いたでしよ？」

葵「いませんッ。五年間フリーですッ」



満里奈「それ自慢することか？　とはいえまあ五年もほっとかれたんじゃ、涼介もあつち行っちまうわな……」

千歌「あつちつて？」

満里奈「あなたのママントコに決まってるんでしょ！」

葵「新田はずっと一宮にいたじゃない。私がない間、涼介とはどうだった？」

満里奈「だから言ったでしょ。待ってられなかったって。私、三〇も後半戦に突入してたんだよ。でもまあ、お陰様で良き夫と出会えましたわ。ちゃんとお坊さんになってくれたし、大満足う」

千歌（M）「どうやらうちのパパは三角、いや四角関係にあつたらしい。あんな太鼓腹オジサンのどこにそんな魅力があつたのだろう、ギモンだ……」

満里奈「カグラーは、どれくらい涼介と会ってない感じ？」

葵「……」

満里奈「わかんないくらいか？」

千歌（M）「葵さんが、押し黙ってしまっ

満里奈「かく言う私も、かれこれ十年は会っ

てないけど……」

千歌「満里奈さんとパパは同級生なんですよ

ね？」

満里奈「それが、なに？」

千歌「どうしちゃったんですか？ どうして

そんなふうになっちゃうんですか？」

満里奈「同じこと、あなたのパパに訊いてみ

なさいよ」

千歌「ママとくつついちゃったから？」

満里奈「当たり前でしょ」&葵「ウイ」

千歌「そんなことで、それだけのことで、み

んなバラバラになっちゃうんですか？」

葵「そういうものでしょ、男と女なんて」

満里奈「男と女の間にはねえ、友情なんて成

立しないんだよ」

千歌「なんか、さみしいです。もう一度会っ

て話し合うとかできないんですか？」

葵「もう一度会って話し合って、涼介と真奈美を別れさせてやろうか？」

千歌「えええええ！」

満里奈「おい、カグラー、まだ未練あんの？二十年経ってんだぞ」

葵「じゃ、そっちは許してんだ？」

満里奈「言ったでしょ。私幸せだし、なにも問題なし。ただ、まあしいて言うなら、真奈美が頭剃って出家してくれたなら、嬉しいかもね」

千歌（M）「ダメだこりゃ……：私は恭子と顔を見合わせ、首を横に振った」

SE 階段を上がる

千歌（M）「家に帰った私は、気分を変えて部屋に閉じこもり、遅れてる受験勉強に取り組むことにした」

真奈美「千歌、勇樹君と連絡とれない？」

千歌（M）「と、ママが二階に上がってきた」

千歌「先輩と？　なんで？」

真奈美「青山高校の吹奏楽ってスゴイ腕前じゃない」

千歌「うん、そうだよ。それが？」

真奈美「うちの病院、開業して五〇周年になるでしょ。来月、尾西市民会館で記念講演をするんだけど、余興と言ったら失礼だけど、ミニコンサートがしたくて」

千歌「毎月慰問コンサートしてるんでしょ？そのメンバーとかじゃダメなの？」

真奈美「せっかくだからいつもと違う色を出したいわけ」

千歌「来月でしょ？ 急だなあ」

真奈美「おねがい」

千歌「わかった。聞くだけ聞いてみる」

S E 階段を下りる

千歌（M）「ママがいなくなっ、私は先輩にラインしようとして、指が止まった。待てよ、と、おもしろいアイデアが浮かんできたからだった」

S E 学校チャイム

里美「人間関係は科学の対象外だ。とりわけ情の入ったやつは」

千歌（M）「翌日、放課後、私は恭子と二人で理科準備室にいる里美を訪ねた」

恭子「まあ要するに、新しい課題が加わったわけよ。葵さんに生地を使ってもらうには、まずは傷ついた関係性を修復しないと」

里美「それで？」

千歌「どう？ 私のアイデア、うまくいくと思う？」

里美「下手な鉄砲、というのもある。やってみるのも悪くはない。幸い、うちの親戚、一宮学園の服飾科にツテもってるから、頼んできてやろうか？」

千歌「ありがとう」

千歌（M）「私たちは日が落ちるまで話し合  
い、作戦を実行することにした」

S E 階段を下りる

千歌「ママ、この前の話、勇樹先輩に断られちゃった。十二月に定期演奏会があつて、準備に忙しいらしく……」

真奈美「え？ そうなの？ どうしよう」

千歌「この際、べつにコンサートにこだわらなくてもいいんじゃない？」

真奈美「それは、そうだけど……」

千歌「ミニ・ファッショショーとか、どうかな？」

真奈美「ファッショショー？ 講演会の後に？ おかしくない？」

千歌「おかしくないよ。だって一宮は繊維のマチだし、一宮らしくていいじゃない」

真奈美「講演会は東京の先生に来てもらつて、高齢福祉の話をするのよ。それがどうファッショショーとつながるわけ？」

千歌「私、高齢の人ほどファッションを楽しむべきだと思うの。ファッションって心を豊かにするものだと思うし」

真奈美「それはわかるけど、もしやるならや

るで、誰に頼むつもり？」

千歌「『モード138』の神楽坂葵さん、し  
かないでしょ」

真奈美「葵さんに？ ……やってくれない  
と思う」

千歌「どうして？」

真奈美「どうしてって……」

千歌（M）「案の定、ママの顔色も途端に重  
くなってしまった」

SE ドア開く

葵「なんで私が真奈美に協力しなきゃいけない  
いわけ！」

千歌（M）「そして、葵さんの反応もまた予  
想どおりだった。私は恭子と学校帰りにリ  
テイルへ寄り、アトリエを訪ねた」

葵「土下座されたって嫌だ」

千歌「悪い話じゃないと思いますよ。『モー  
ド138』の宣伝になると思いますよ」

恭子「そうそう、なんととっても客席には八

〇〇人のお客さんがいますし」

葵「は、八百人……」

千歌「それに、これからの高齢社会、ターゲットの年齢層は幅広に、少し上げてみるのもおもしろいと思いますよ」

葵「そんなこと千歌ちゃんに言われたくない。わかってるし」

千歌「だったら話は早いじゃないですか。ビジネスに私情を持ち込むのは……」

恭子「そうそう、ビジネス、ビジネス」

千歌「ビジネス、ビジネス」

葵「うっさいなあ……」

SE (ゆたかふえの) ドア開く

満里奈「はああ？ 真奈美の病院のイベントで、ファッションショー？ わけわかんないコラボだなあ」

千歌(M)「私たちは帰り足で『ゆたかふえ』に寄り、この際、満里奈さんも巻き込むことにした」



恭子「仲直りには、とにかくなんでもいいから接点をつくるのが大事、と思ったんですよ」

満里奈「だったら、慰問コンサートでいいと思うけど」

恭子「慰問コンサート？」

満里奈「昔やったんだよ」

千歌「昔？」

満里奈「あ、知らんか。千歌ちゃんまだ生まれてないしね。真奈美んトコの病院、毎月慰問コンサートやってるじゃん。そこでやったんだよ、昔、涼介とカグラが。涼介はサックス、カグラはヴァイオリン。ちなみに真奈美が伴奏してたな」

千歌「葵さん、ヴァイオリンやってたんですか？」

満里奈「え？ 聞いてない？ パパ、プロ目指して上京してたのは知ってるよね？」

千歌「ええ、ちらっと」

満里奈「そのとき、カグラとユニット組ん

でたみたい」

千歌（M）「それはそれは、耳寄りな情報だった」

恭子「だったら、そのコンビ、ファッションショーの中で復活させちゃうのはどう？」

千歌「だね。それ、おもしろい」

満里奈「ていうか、あんたたちいったいなにがしたいわけ？ 個人的には、涼介とカグラーが喧嘩してくれたほうが、精神衛生上、爽快だけどね」

恭子「うわ、サイアクだ」

千歌「とりあえず、私たちは情報を伝えるに來ただけですから。講演会&ミニ・ファッションショーは、ちょうど一ヶ月後ですよ。でわでわ」

SE 学校チャイム

里美「うまくいってる？」

千歌「順調順調」

里美「親戚に話しつけといたぞ。一宮学園、

全面協力してくれるって」

恭子「ありがとう、スゴイね」

千歌（M）「私たちはすべての駒をそろえて、  
盤上に配置し終えた……」

SE 鳥の声

千歌（M）「そして、一ひとつき月が過ぎ、エックス  
デーの朝を迎える……」

真奈美「ホント、葵さんが引き受けてくれた  
なんて、今でも信じられない」

千歌「ママ、どれくらい口きいてなかった？」  
真奈美「話しくらいはしてるわよ。ときどき  
ショッピングモールでばったり会うことも  
あるし。ただ、葵さん、私のこと嫌ってる  
でしょう？」

千歌「大丈夫、そんな関係もきつと今日で終  
わるし」

真奈美「そうかしら……」

千歌「それじゃサプライズ、よろしくお願  
いします、ママ」

千歌（M）「そう、私たちはさらにサプライ

ズを仕込んでいた」

S E 人ばかり

講師「老いとは何か。みなさんそれを病気とかカラダの問題だけで論じてますよね。むしろこれからの時代、精神的に老いないことのほうが大事だと思っっています」

千歌（M）「講演会は盛況だった。講師の先生はユーチューブでも人気があるらしく、意外と若い人たちも集まっていた」

講師「この後、一宮在住のデザイナーさんが、世代を超えて楽しめるファッションを提案してください、ということですので、私も楽しみにしています。本日は御清聴ありがとうございました」

千歌（M）「そして、講演会が終わり……」

S E 拍手喝采

葵「さあ、いくわよ！」

千歌（M）「なにも知らない葵さんが意気揚々と、予定どおりファッションショーをは

じめた」

M

千歌（M）「一宮学園の先生と生徒たちが『モ  
ード138』の衣装で身を飾り、ランウエ  
イに見立てた舞台を、上手から下手へモデ  
ルウォークしていく。まさに多世代で、下  
は高校生、上は後期高齢の方までがモデル  
を努めていた」

SE 拍手

千歌（M）「お世辞に抜きに、黒がよくのる  
尾州ウールの特徴を最大限に活かしてる葵  
さんのデザインは、素敵だった。品があり、  
シックでありながら、エッジが効いている。  
それになにより、これからのシーズンにぴ  
ったりだった」

SE 拍手

千歌（M）「とはいえ、ごめんなさい、葵さ  
ん、メインディッシュはもうファッション  
ショーではなくなっていたのです……」

SE 拍手

千歌（M）「拍手喝采を受けて、舞台袖から、葵さんが姿を現す。その手は、ヴァイオリンを持っていた。そう、ヴァイオリンだ。私がそうするよう、提案したのだ」

M O U T

千歌の声「葵さん、デザイナーはデザイナーで、キャラ立ってたほうがいいと思うんですよ。聞きましたよ。昔ヴァイオリンしてたー代わりに持って入場、なんてしたら、セーブ感出ていいと思いますよ」

葵の声「え？　そおお？」

葵「ご声援をいただき、ありがとうございます。した。『モード138』デザイナーの神楽坂葵です。一宮は毛織物の世界三大産地で。これからも素材の良さを活かしたモードを発信していきたいと思っています」

男（客席）「お姉さくん、ヴァイオリンひいてよ」

S E 拍手

恭子（客席）「ヴァイオリンひいてくださ  
いッ」

千歌（M）「早速、仕込んでおいたサクラが  
騒ぎでした」

客席「葵さくん！ ヴァイオリン！」

千歌（M）「葵さんはびっくり、驚き顔を見  
せたが、こうなることはたぶん、多少予想  
はしてたのだろう。どうしよっかな、とい  
った感じで腰をくねらせる。と、舞台袖か  
ら、金色に輝くサックスを手にした、パ  
パ  
が……」

葵「え……涼介……」

涼介「葵はどんな場所でも、どんな状況でも、  
一〇〇%でやる主義なんだろ」

葵「……これは、どういうこと？」

涼介「やるの？ やらないの？」

恭子（客席）「ヴァイオリンひいてくださ  
いッ」

SE ピアノ台車

千歌（M）「今度はホールスタッフがピアノ

を運んでくる。そして、ママもまた……」

真奈美「伴奏は私が引き受けますから」

葵「真奈美……どうやら私、千歌ちゃんに一杯食わされたみたいね」

真奈美「葵さん、曲はあのと一緒のものでよいかしら？」

客席「葵さくん！ ヴァイオリソン！」

葵「やればいいんでしょ、やれば。頼むから、足だけは引っ張らないでよ」

涼介「百も承知だ」&真奈美「もちろんです」

#### M 演奏 A

しばらく流したところで、

千歌（M）を重ねる。

千歌（M）「パパ、ママ、葵さんの奏でる音が一つに重なり、溶け込んでいく。二〇年ぶりの演奏だなんて、信じられない。昨日も一緒に立ってたんじゃないか、って思っ  
てしまうくらい、呼吸が合っていた。ときどき、ちらちらと横目で、葵さんがパパの顔を見ている。きっとなにか言いたいこと



があるんだろう。けれどそれを押し殺すように、軽く首を左右に振ると、葵さんは音に集中する。湧き上がる感情をヴァイオリンの響きで、鎮めているかのようにだった。客席には、満里奈さんの姿があつた」

満里奈の声「絶対邪魔してやる！」

千歌（M）「とか言つてたくせに、からだを揺らして、音の世界に身を委ねていた。満里奈さんは、パパのサククスが好きだった、ことは昔から聞いている……さて、私にできることは、ここまで。後は野となれ山となれッ、だ」

M O U T

S E 拍手喝采

男（客席）「ブラボーっ！」

千歌（M）「客席は思わぬ余興に喝采だった。パパ、ママ、葵さんは照れくさそうに一礼すると、舞台袖に下がった」

葵「千歌ちゃん、全部あなたが仕組んだことね？ やられたわ」

千歌「ごめんなさい」

葵「でも、なんかふっきれた。ありがとう」

千歌「ふっきれた？」

千歌（M）「葵さんはパパともママとも目を

合わさず、楽屋へ向かう」

涼介「待てよ」

葵「なに？ まだなんか用？」

涼介「葵の音、昔となにも変わってなかった。

真っ直ぐだったよ」

葵「それだけ？」

涼介「変わったかと思ってたから。変わってしまつたと、そう思ったから。フランスへ行っちゃまい、どんどん遠くに、手の届かないところへ行っちゃまうから、オレ……」

葵「（遮り）言わなくていいし。聞きたくない」

涼介「許してほしい」

葵「……やめてよ。（強がり）勘違いしてない？ 私べつに涼介のことなんて、なくとも思っていないし。そうよ、フランスで

「イイ男できちゃってさあ、涼介のことなんか、すーっかり忘れちゃってた。変わってないどころか、変わりすぎちゃってゴメンだわ」

満里奈「そうそう、男なんてね、たーくさんいるからッ、三五億」

千歌（M）「と、どこから入ってきたか、満里奈さんまで乱入して来る」

満里奈「相変わらず、あんたたち息びったりだったじゃない。演奏、悪くなかったよ」

葵「一応、こっちには歴史があるからね、レ・キ・シが」

満里奈「そんな歴史、とっくに錆び付いてるくせにいい」

葵「言ってる勝手に。それじゃ私はこれで。この後私は楽しい楽しいファッションショーの打ち上げよッ」

真奈美「待って、葵さん」

千歌（M）「去りゆく葵さんの背中を、どこか淋しげな葵さんの背中を、ママが呼び止

めた」

真奈美「私たちの生地を、尾藤毛織の黒生地を、神楽坂葵さんに、使っていただけないでしょうか？」

葵「なによ、急に」

真奈美「やつと言えましたよ。本当はもっと、ずっとずっと前に、言えたらよかつたんですけど、私……ごめんなさい」

葵「なんであんたまで謝るわけ？」

真奈美「だって私のせいで、みんなバラバラに……私が……」

葵「はあああ？ あのねえ、うぬぼれるのはやめてくれないかなあ」

満里奈「そうそう、最後お爺ちゃん亡くなるまでの、あの献身的な介護、あんなの見せつけられたらさあ、そりゃあ涼介、イチちまうわな。ねえ？」

涼介「そ、それは……」

満里奈「べつに今さら真奈美のことは恨んでないよ。もう過去だし、過去」

葵「そうそう、私は男なんかより、ただただ、超一流の生地がほしただけ。(鬼滅の刃の歌調で)それだけさあ」

涼介「だったら、オレからも頼むよ。絶対に保証する。だって尾藤毛織の黒生地は、あの爺ちゃんが見つけた、最高傑作なんだし」

葵「わかったわ。考えておく。涼介に頭下げられると、悪い気はしないわね」

千歌(M)「終始葵さんは上から目線だったが、その表情は憑き物が取れたように、晴れやかだった。私は心の中で、ガッツポーズを決めた」

S E 車の中

涼介「千歌、ありがとう」

千歌(M)「帰りの車中で、ぼそつとパパが言った」

千歌「ねえ、結局パパは誰が一番好きだったの？」

涼介「みんなそれぞれイイところがあるから、

比べるなんてできないよ」

千歌「うわッ、最低！ だからこうなっちゃったんだよ」

涼介「満里奈は、物心ついたときからずっと隣りにいた。距離が近すぎて、家族のよう。葵は、上京したときに出会った。一番の理解者だったし、同じ夢を追いかけられる存在だった」

千歌「ママは？」

涼介「ママは、好きな人」

千歌「どこが好きだった？」

涼介「内緒。千歌にも好きな人ができたら、自然とわかるようになるさ」

千歌（M）「ていうかもう、できてますけど。なんて心の中でつぶやいた私」

M

千歌（M）「新しい日常がはじまった。葵さんは、パパとママの生地を使って新作を発表すべく、準備をはじめてくれた。そして、

その企画会議は、満里奈さんのお店で行った。そう、満里奈さんのお店だ」

満里奈「淋しい話だけど、また一つのこぎり屋根が廃業でね。譲ってもらったわけ。のこぎり屋根は一宮のシンボルだからね。守っていききたいと思うわ」

千歌（M）「みんな尾州ウールを介してつながっている。そう思った。尾州ウールがパパを、ママを、葵さんを、満里奈さんをつなげてくれている、今もこうして……だから私は、尾州ウールに『ありがとう』って心底言いたい気持ちになった」

M O U T

S E 雑踏

千歌（M）「春が来た。私は無事に受験を突破し、晴れて青山高校に進学した。すべてが順風満帆だった。このときまでは……」

S E 鉄道

千歌（M）「そして、あの日を、あの暑い夏

の日を、私は迎える……」

SE 踏切の音

F・O

N 「『久遠く尾州ウールが紡ぐ絆の物語』  
お聞きくださり、ありがとうございます。  
この物語は、二〇二二年二月に放送したラ  
ジオドラマ『がちゃまん！』の、一八年後  
を描いた続編になります。そして、この物  
語の続きは、朗読劇『久遠く人柱観音奇譚  
』として、二〇二三年二月五日、日曜日、  
一宮市尾西市民会館ホールで舞台上演され  
ます。千歌の物語にはまだ続きがあります。  
みなさまぜひ、ご来場ください」

〈了〉